平成 29 年度

（義肢装具学科）入学試験問題

教養（国語）

試　験　時　間　　９：３０～１０：３０

（注意）

1 係員の指示があるまで、問題用紙及び解答用紙に触れないで下さい。

2 問題は 2 頁～12 頁に印刷されています。

3 国語の解答番号は 12 ～ 22 です。

4 解答用紙に氏名、受験番号及び受験科目名を記入して下さい。

5 解答方法は次のとおりです。

例　〔1〕埼玉県の県庁所在地として、正しいのはどれか。 1

①　前橋市　②　甲府市　③　さいたま市　④　横浜市　⑤　千葉市

〔1〕の正答は「③　さいたま市」ですから解答用紙の解答番号 1 の横に並んでいるマーク欄の中の「③」を鉛筆またはシャープペンシルで「●」のように塗りつぶして下さい。

6 机の上には鉛筆、シャープペンシル、消しゴム、時計（計算機能のついていないものに限る）、受験票以外は置かないで下さい。

7 受験票は番号札の手前に置いて下さい。

8 マスクを着用している者は、試験官が本人を確認する間、マスクを外して下さい。

9 ハンカチ、ティッシュペーパーを使用する者は、静かに挙手をして、係員の指示に従って下さい。

10 試験中に気分が悪くなったり、トイレへ行きたくなった者は静かに挙手をして、係員の指示に従って下さい。

11 試験問題に関する質問は一切受け付けません。

12 途中で退室する者は、解答用紙を机の上に置き、静かに挙手をして、係員の指示に従って退出して下さい。ただし、試験開始後 30 分間及び試験終了前 10 分間の退出は認められません。

13 試験終了後、試験問題は持ち帰って結構です。

問　次の文章を読んで、後の各問いに答えなさい。

《タテ割り評価とヨコ割り評価》

私たちはこれまで、木は時代遅れの原始的な素材だと思っていた。だからこれに新しい技術を加えて、工業材料のレベルに近づけることが進歩だと考えた。その結果、エンジニアリングウッド（改良木材）と称するものが次々に生み出された。それらは従来の木の欠点を補い、大量の需要に応じ、生活を豊かにするのに大きく役立ってきた。たしかに木材工業は発展したのであった。

だが一方、最近になって一つの疑問が持たれはじめてきたように思う。それは木というものは自然の形のまま使ったときが一番よくて、手を加えれば加えるほど本来のよさが失われていくのではないか、という反省である。考えてみるとそれは当たり前のことだったかも知れない。木は何千万年もの長い時間をかけて、自然の環境と摂理に合うように、少しずつ体質を変えながらできあがってきた生きものだったはずである。木は自然の子で、そのままが最良なのである。

だから木を構成する細胞の一つひとつは、寒いところでは寒さに耐えるように、雨の多いところでは湿気に強いように、微妙な仕組みにつくられている。あの小さな細胞の中には、人間の知恵のはるかに及ばない神秘がひそんでいるとみるべきであろう。それを剥いだり切ったり、くっつけたりするだけで、神のつくった微妙な構造までもが改良されると考えたこと自体、［　I　］だったかも知れない。それはちょうど、一時流行した自然を征服するという言葉が、実は思いあがりだったことが、いま反省されているのと同じ事情ではないだろうか。

木を取り扱ってしみじみ感ずることは、木はどんな用途にもそのまま使える優れた材料であるが、その優秀性を数量的に証明することは困難だということである。なぜなら、強さとか保温性とかいったどの物理的・化学的性能をとりあげてみても、木はいずれも中位の成績で、最高位にはならないから優秀だと証明しにくい。

だがそれは抽出した項目について、一番上位のものを最優秀とみなす項目別のタテ割り評価法によったからである。いま見方を変えて、ヨコ割りの総合的な評価法をとれば、木はどの項目でも上下に偏りのない優れた材料ということになる。木綿も絹も同様で、タテ割り評価法で見ると最優秀にはならないが、「ふうあい」までも含めた繊維の総合性で判断すると、こんな優れた繊維はないということは、専門家の誰もが肌を通して感じていることである。総じて生物系の材料というものは、そういう特性を持つもののようである。

以上に述べたことは、人間の評価法のむずかしさに通ずるものがある。二、三のタテ割りの試験科目の成績だけで判断することは危険だという意味である。たしかにいまの社会はタテ割りの軸で切った上位の人たちが指導的地位を占めている。だが実際に世の中を動かしているのは、各軸ごとの成績は中位でも、バランスのとれた名もなき人たちではないか。天は二物を与えない。偏差値人間といわれる人はとかくくせがあって馴染みにくいが、バランスのとれた人は人間味豊かで親しみやすい。頭のいい人はたしかに大事だが、バランスのとれた人もまた、社会構成上欠くことのできない要素である。だがいままでの評価法では、そういう人たちのよさは浮かんでこない。思うに生物はきわめて複雑な構造を持つものだから、タテ割りだけで評価することには無理があるのであろう。

科学技術の急速な進歩で、私たちはすべての対象を物理的・化学的に分析すれば、それで事は足りると考えてきた嫌いがあった。だが生命を持ったものは、たとえ木のような素朴な材料であっても、無機質のものとは違うもう一つの神秘な次元を持っているのである。いま私たちにとって大切なことは、A物から人に視点を移して、発想の転換をはかることであろう。木はそのことを黙って教えてくれているように、私は思う。

《木造校舎復活の意味するもの》

木のよさを語るには木造校舎を例にすると分かりやすい。私たちは明治の初めまでは、木を使って村の文化の中心を造ってきた。役場も学校も公会堂もすべて木造であった。しかし大正時代になると、木造校舎は急速に減りはじめた。木は狂うし、腐るし燃える。見掛けが貧弱なうえに地震に弱いからダメだ。

鉄筋コンクリートは理想的な材料だ。それはまた文明開化の象徴でもある、という考え方が定着して、町も村も木造校舎を鉄筋コンクリート校舎に建て替えることに懸命になった。やがて全国の小中学校は九八％が鉄筋校舎に変わり、目標達成まであと一歩に迫った。

ところが昭和も終わりに近づいたころ、木造校舎が脚光を浴びることになった。アメリカは貿易赤字を解消する対策として、木材の輸入を強く要求した。その結果、消えかけていた木造校舎は再び日の目を見ることになったのである。

さて、木造校舎ができあがってみると、評判は(ア)すこぶるよい。児童が喜び、父兄も褒めるというように、急に注目されて話題の種になったのである。

昔は校舎の清掃といえば、雑巾がけが代表的なものであった。節だらけのすり減った床板がピカピカに光っていることが学校の誇り

であった。それは父が磨き、母が磨き、兄も姉も長年にわたって拭き込んで大切に守ったからであった。ところがコンクリート校舎になって事情は一変した。人間尊重という(イ)お題目が唱えられて、手間のかからないメンテナンスフリーこそが理想だ。雑巾がけのような労働は罪悪の目で見られるようになった。

そこで床にはビニールタイルを張り、家具はスチール製になった。そのため掃除のときは、家具は床の上を滑らせて片隅に寄せ、モップでサッとなでればそれでおしまい。それこそが理想の教室づくりだと考えられていたのである。

ところが木造校舎が建って、雑巾がけが復活した。そこで気がついたのは、面倒でも拭けば拭いただけ奇麗になる、木のような材料こそ教育の場にふさわしい、ということであった。そのうえ木は柔らかくて人間味がある。こういう材料こそが本物だ。教育の場に手抜きはダメだ。木のような生物材料に囲まれた環境に生徒を置けば、いじめも減るし、暴力化もやわらぐのではないか、というような見方をする人も出はじめた。

アメリカの圧力から生まれた木造校舎であったが、それが明治以降一〇〇年の間に、私たちの失ってきたものを取り戻してくれる動機になったのである。以上のような経緯を経て、木造校舎に対する関心は急速に高まってきた。味気ない鉄筋コンクリート一辺倒だった学校建築も、少しずつ変わりはじめ、B「器」の質が教育環境の大事な要素として、議論されるようになったのである。

《薬師寺東塔の美しさ》

金属と木材でものを作るとき、造形的な効果のうえで一番大きく違う点は、金属は鋭い刃物で切った硬い線で輪郭が截然と区切られているのに対し、木材は軟らかい線で全体がふんわりと囲まれている、ということである。

それはちょうど、烏口で引いた機械製図の線に対する、軟らかい鉛筆で書いたフリーハンドの線との違い、といったら、分かりやすいであろう。

故西岡常一棟梁は法隆寺の円柱を削るとき、台カンナでは硬い線になるので、ヤリガンナ（槍鉋）を使った。しかもそれは新しい鋼ではなく、飛鳥時代の古い釘を鍛え直した刃物を使ったという。これはまさにヒノキの木肌に、ソフトな鉛筆の線の軟らかさを与えようとしたものであった。

木と金の違いを、もっとはっきり感じさせる話を書こう。奈良薬師寺の東塔は、白鳳の美を伝える貴重な遺構で、美術史家のフェノ

ロサが「凍れる音楽」と賞讃したことでも有名な、日本一美しいといわれる塔である。薬師寺の再建に当たった西岡棟梁の話によると、この塔は柱も梁も垂木も一本として同じ寸法のものはない。屋根を支える斗栱（ときょう）（柱の上の組物）のうち斗を例にとるなら、大きいものと小さいものとでは、幅が三センチも違うという。

斗の幅の平均値は二五センチだから一割以上の差がある。だからむしろ、ばらばらという表現が当たっていよう。それを組んであの美しい形を造り、一三〇〇年の風雪に耐え、地震にも倒れなかったというのは、不思議というほかはない。法隆寺についても事情は同様で、用材の大きさはばらばらだという。

木は生物材料だから、同じものが二つないというのが特徴だ。人柄に違いがあるように木にも木柄の違いがある。それを組み合わせるところがコツで、柔らかな味わいを持ち、生きものといった親しさをかもし出すことができるのがミソである。

以下は薬師寺の再建で、金堂と西塔を建てるときの話である。建物の用材はタイワンヒノキで、製材機械を使って木取られたが、機械が精密になったので、出てくる部材の寸法は正確そのものである。それを使ってできあがった金堂を見ると柔らかさが足りない。東塔の姿が筆で描いた墨絵の感じであるとすれば、金堂は機械製図といった感じで、どこか冷たく、人間味に欠けていた。

そこで西塔を作るとき、西岡棟梁は次のような対策を採った。塔の初層には一六本の柱が必要だが、それを一六人の宮大工に一人に一本ずつ与えて勝手に削らせ、個性の出た柱を組み合わせることにした。そうしたら柔らかい味が出て、美しい西塔ができあがった、というのである。これが西岡流の木を生かすコツの話である。

棟梁の話の中でもう一つ付け加えたいのは、木を殺す凶器は鉄だという言葉である。木と木を組み合わせただけなら地震にも台風にも耐えられる。だが木を金で固定すればそこから傷むから、やむを得ない時だけ釘を使う。法隆寺で使った釘は飛鳥の古い釘を打ち直して使ったから長くもつ。最近の洋釘は二〇年しかもたない。ヒノキだけなら、法隆寺で見るように、一四〇〇年ももち続ける建物を、c鉄と無理心中させるのはいかにも惜しい。それが西岡棟梁の信念だったのである。

《一〇〇〇年後の塔の姿を予測する》

串田孫一氏は誰もが木は生きものだということを知っている例として、名もない樵夫（きこり）の次のような言葉を紹介している。「猟師は一瞬のうちに獣を殺せるからまだいいが、自分たちは鋸でじわじわ木を殺していくので余計につらい。木に上衣をひっ掛けるのでさえも、

枝が重くて可愛そうに思う」というのである（『毎日新聞』一九七二年七月七日）。近ごろ「人間尊重」という言葉がよく使われる。たしかに人間の尊重は大事なことに違いないが、それよりもう一段上に、「自然の尊厳」があることを忘れてはならないであろう。

国土庁事務次官を務められた的場順三氏は近著『座して待つのか、日本人』（ワック、二〇〇〇年）の中で、いま私たちが使っている言葉の中で、一番間違っているのは「地球に優しく」だと述べておられる。私たちはアメリカ流の収奪経済にどっぷりと漬かっているために、自然から根こそぎ資源を略奪する行為を繰り返している。アフリカや東南アジアの人たちの生活には、自然に対する畏れがあって、自然と共生していく知恵が身についている。日本では経済人のほうが科学者よりも、はるかに謙虚さを失ってしまった。その例は「地球に優しく」という言葉である。これは人間が主人公で、地球を従属者の地位に置いている。だが実際はその逆で、私たちは地球によって生かされている。その恩を忘れているのではないかと警告されている。まさにその通りであるが、命があるのは木に限らない。西岡棟梁は鉄にも命があると考えていた。法隆寺を修復するとき使ったヤリガンナは、古い和鉄和銅を使って作ったものであった。それでないと古い建物の柔らかい自然の仕上がり線を出すことはできないと考えたのである。

ここでもう一つ、建物全体も生きものだという話をつけ加えよう。奈良の薬師寺には塔が二つある。東塔は一三〇〇年前に建てられた白鳳の美を代表する古い塔で、西塔は昭和五七年に西岡棟梁が再建した新しい塔である。西塔は東塔に合わせて造られたものであるが、高さが三〇センチ高く、軒の反りも大きい。それは塔組みの横方向に積んだ木が縮んで、一〇〇〇年後には東塔と同じ高さになり、軒の反りも緩やかになって、東塔と同じあるべき姿に納まるという西岡棟梁の計算である。このような建築技術者はヨーロッパにはいないであろう。日本文化の底流になっているのは、［　　Ⅱ　　］という哲学なのである。

《白木の肌とお札様》

私たちの祖先はこの世に「産霊神（むすびのかみ）」がいて、その神が住む土地にも、眺める山川草木にも、霊魂が与えられると信じていた。『和名抄』には、「木霊あるいは木魂」という言葉が出てくる。それは樹木に精霊が宿っているという意味で、木は神が天から降りてくる「よりしろ」だったのである。

このような樹木を信仰の対象とする受け取り方は、木が伐られて材木になったのちも引きつがれる。

「お札様」というのはその代表的なもので、あの白木の肌に精霊を感じているのである。私たちは機械文明を象徴する自動車の中に、

木片のお札様が祭られている矛盾を笑うが、それはついこの間まで、敷地の中にご神木を祭っていた屋敷林の縮図だと見れば、納得できることである。日本人の心の中では、立ち木と材木とは切れ目なくつながっているのである。

白木とは針葉樹の木肌を指すが、それは古来清浄無垢の代表とされた。この木肌を活かそうとする美意識は日本人独特のものといってよい。静かで自然、上品で控え目なヒノキやスギの木目を見ていると、飽きることがない。だから食物と深い関係を持つようになった。

最も身近な例は割箸だが、木の桶もまた、すしや魚貝の容器として欠かせない道具である。日本人はまず[D]目で物を食べるというが、白木と日本料理とは切っても切れない関係にある。木が食物とこんなに深く結びついている例は外国にはないであろう。

ア　だからナラの塗りあげられた美しさなどは、むしろ下品ですらあったと思われる。

イ　英国人はオーク（ナラ）をもって木材の王者とし、オークの柾目に現れる虎斑（とらふ）に最上の評価を与えている。

ウ　しかし、絵絹の白地の上に墨一色で描かれた南画を見て、幾百の色彩を感じ取る日本人は、一見平凡に見えるヒノキやスギの木肌にも、無限の色彩の変化を味わうことができたのであろう。

エ　美が外形的で物質主義の傾向を持つヨーロッパ的嗜好からすれば、輝かしく塗りあげられた華麗なナラの木目こそは、木材の中で最も美しいものであったに違いない。

美しいものの上に、さらに美しさを置こうとするヨーロッパ流の「多々ますます弁ずる主義」と、床の間に残されたただ一輪の朝顔に、万花以上の効果を求めようとした利休の含蓄主義とは、まったく正反対のものだったのである。

炭の上に置かれた伽羅の香が、ほのかに漂ってくるのを待ちながら、物の余韻、たしなみをしみじみと噛みしめることが、日本人の持つ本質的な情感であったから、私たちの祖先はヒノキやスギの枯淡な木肌にこそ、真に心の[ウ]琴線に触れるものを見出したに違いない。

そして国産の針葉樹を自由に使いこなすことによって、日本独特の白木文化を育てていったのである。

＊本文は一部原本を省略しているところがある。

（出典　小原二郎『木の文化をさぐる』より）

問一　傍線部(ア)〜(ウ)の語句の意味として最も適当なものを、次の各群の①〜⑤のうちから、それぞれ一つずつ選びなさい。解答番号は 12 〜 14

(ア)　すこぶる

① 早々に
② 過去にはみられないほど
③ 洗練されていて
④ 予想以上にたいへん
⑤ 想定した範囲内でそこそこ

(イ)　お題目

① 十分研究を積んで蓄えた、学問や技芸上の深い知識
② 何か事をするにあたっての根拠または口実
③ ありがたそうに唱えているばかりで実質のない主張
④ 物事の大原則となる約束ごと
⑤ 行為や主張を正当化し、権威付けるもの

(ウ)　琴線

① 感動や共感など心の動き
② 侘びやさび
③ 目上の人の激しい怒り
④ 美意識
⑤ はかなさ

問二　空欄 Ⅰ 、 Ⅱ を補うのに最も適当なものを、次の①～⑤のうちから一つ選びなさい。

解答番号は（Ⅰ） 15 、（Ⅱ） 16

Ⅰ

① 科学技術万能主義
② 大量生産の必要性
③ 自然の摂理への回帰
④ 近代科学への過信
⑤ 物質主義への批判

Ⅱ

① 地球に優しく
② 森羅万象のすべてが生命を持つ
③ 自然と共生していく
④ 物の余韻、たしなみをしみじみ噛みしめる
⑤ 美しいものの上に、さらに美しさを置こう

問三　傍線部A「物から人に視点を移して、発想の転換をはかること」とあるが、これはどういうことか。最も適当なものを、次の①～⑤の中から一つ選びなさい。解答番号は 17

① 生物はきわめて複雑な構造を持つものであるから、従来のタテ割りだけで評価することには無理があり、ヨコ割りの総合的な評価を取り入れる必要があるということ。

② 生命をもつ人間は、物とは違う神秘の次元をもつことから、従来のタテ割り評価ではとらえられない、総合的な評価によって浮かび上がる優秀性にも着目すること。

③ 物事をすべて物理的・化学的に分析することに満足することなく、人間尊重へと考えを転換すること。

④ タテ割り評価で上位に立つ偏差値人間といわれる人ではなく、バランスのとれた人間味豊かで親しみやすい人を中心に社会を構成するように転換が必要であるということ。

⑤ 環境問題を解決するために、大量生産を伴う物質至上主義を改めて、自然の摂理に従った生き方への転換をはかること。

問四　傍線部B「「器」の質が教育環境の大事な要素として、議論されるようになった」とあるが、これはどういうことか。最も適当なものを、次の①～⑤の中から一つ選びなさい。解答番号は 18

① 学校の校舎を何で建築するのかということも、教育に関わる大事な要素の一つであるという考え方が出てきたということ。

② 学校は教育をする場であるという観点から、木造校舎の建築に用いる木材の質が問われるようになってきたということ。

③ 木材を輸入し、木造校舎の建築に踏み切った指導者の質が、教育の現場で評価されるようになったということ。

④ 学校における教育の内容よりも、学校の校舎を何で建築するのかということの方に視点が移ってきたということ。

⑤ 木造校舎にすることで復活した雑巾がけが、教育において大事な要素であるという考え方が出てきたということ。

問五　傍線部C「鉄と無理心中させる」とあるが、これはどういうことか。最も適当なものを、次の①～⑤の中から一つ選びなさい。

解答番号は 19

① 鉄でできた製材機械で木取られた木材を使用すると、出来上がった建物には柔らかさが足りないということ。
② 木を殺す凶器は鉄であり、木を金で固定するとそこから痛むということ。
③ 釘を使うことは、日本の伝統的な建築物にはみられなかったことで、洋釘を用いることは建築物をだめにするものだということ。
④ 木と木を組み合わせただけの建物であれば、地震にも台風にも耐えられるが、飛鳥の古い釘はともかく、最近の洋釘は二〇年しかもたないということ。
⑤ 木材だけを使用した建物であれば、長期にわたって生き続けるが、鉄を使用することでそこから木材が傷み、鉄の寿命とともに建物の寿命が終わってしまうということ。

問六　傍線部D「目で物を食べる」とあるが、これはどういうことか。最も適当なものを、次の①～⑤の中から一つ選びなさい。

解答番号は 20

① 実際の味覚よりも見た目を重視するということ。
② 器や盛り付けなどを楽しむこと。
③ 料理には、最も合う器を必要とするということ。
④ 見た目で料理を選びがちだということ。
⑤ 物事を見分ける眼力が、食べるときにも発揮されるということ。

問七　□の中のア～エの文章を、文意が通るように並べ替えたとき、最も適当なものを、次の①～⑤のうちから一つ選びなさい。解答番号は 21

① ア―イ―エ―ウ
② ア―ウ―エ―イ
③ イ―エ―ウ―ア
④ イ―ウ―エ―ア
⑤ エ―イ―ア―ウ

問八　本文の内容と合致するものを、次の①～⑤の中から一つ選びなさい。解答番号は 22

① 鉄筋コンクリートの校舎になって雑巾がけをしなくなったため、いじめや暴力などが増えてきた。
② 樹木は日本人にとって信仰の対象となるが、樹木が伐採されて材木になった後には、信仰の対象ではなく道具となる。
③ ヨーロッパでは数が多ければ多いほどよいとするが、日本人は一輪の朝顔に万花以上の効果を求める。
④ 薬師寺の西塔が東塔よりも高いのは、建物に柔らかさをだすことを優先させて、個性の出た柱を組合わせた結果である。
⑤ 建物に柔らかさや、親しさをかもし出すところがコツで、異なる木柄を組み合わせるのがミソである。

義肢装具学科　教養（英語・国語）　正答

問題番号			正答	問題番号			正答
英語				国語			
問 1	1		2	問 1　（ア）	12		4
問 2	2		4	（イ）	13		3
問 3	3		1	（ウ）	14		1
問 4	4		4	問 2　Ⅰ	15		4
問 5	5		2	Ⅱ	16		2
問 6	6		1	問 3	17		2
問 7	7		4	問 4	18		1
問 8　A	8		1	問 5	19		5
B	9		4	問 6	20		2
C	10		2	問 7	21		3
D	11		1	問 8	22		3